4-37

ファッションと建築について

日大生産工(院)　○重松　良佳
日大生産工　　曽根　陽子

1　はじめに

建築とファッションには様々な共通点がある。人を保護するという基本的役割、共にアイデンティティーを表す手段であるということ、さらに手作りから工業大量生産に変化する歴史的発展段階や共に同じ芸術思潮をもっていることなどが挙げられるだろう。近年の建築は、人間がファッションを身にまとうかのような感覚で、より表層的表現意識が高まりつつあるように感じる。本研究では、ファッションに関する表現技法で建築と共通するものに着目し、建築のファッション化とデザインの変容について検証し報告する。

2　調査概要

2-1　調査対象

1980年から2009年までに発行された新建築に記載されている全作品を対象とし、5年おきに調査した。ただし、囲み記事などの作品は除いた。

表1　対象作品一覧

雑誌名	発行年	発行月	作品数
新建築	1980年	1～6月	87
新建築	1985年	1～6月	86
新建築	1990年	1～6月	72
新建築	1995年	1～6月	93
新建築	2000年	1～6月	87
新建築	2005年	1～6月	93
新建築	2009年	1～6月	73

2-2　調査方法

本研究では、2007年開催の展覧会「スキン＋ボーンズ-1980年以降の建築とファッション」でリストアップされていた、建築とファッションの10の共通技法を元に分類項目は選定した。直接ファッションの表現方法と関わりが薄く、抽象概念と思われる5つの項目は排除し、残りの5つに「飾る」という項目を加え共通の表現技法の分類項目を設定した。

また、その分類項目がファサードなどの表面的表現を重視しているのか、内部空間などの内面的表現を重視しているかを判断し表層的意識がどの程度反映されているかも読み取ることとした。さらに、表面的か内面的かに加えてその表現が形態で主張しているのか、素材で主張しているのかも判断しデザインの傾向を読み取る手段として活用することとした。

分類の判断方法は、記載されている設計者の意図や写真表現により判断した。図1に示したダイアグラムに沿って分類していき、表2に示した分類項目の表現技法の有無を様々な角度から検討した。そして、該当した表現技法が機能性をもっているかいないのかも、機能性についての記載の有無で判断し記録していった。

有れば1点、無ければ0点とする加算方式で点数化し、あらゆる分野の傾向の可能性を探った。

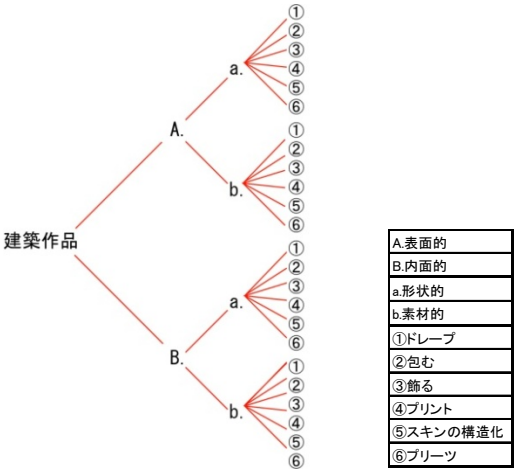

図１　分類過程のダイアグラム

表２　ダイアグラムの詳細

A.表面的	表現技法がファサードなど表面に見られる場合。
B.内面的	表現技法が内部に見られる場合。
a.形態	表現技法が形態で主張している場合。
b.素材	表現技法が素材で主張している場合。
①ドレープ	緩やかなカーブ、円形、ひだなどの特徴がある場合。
②包む	構造体を覆うなど何らかのものを包む特徴がある場合。
③飾る	機能とは別にデザインとしての特徴がある場合。
④プリント	着色、柄などの特徴がある場合。
⑤スキンの構造化	デザイン性をもったスキンが構造体となっている場合。
⑥プリーツ	扇状、折りひだのような特徴をもっている場合。

The Relation of the between Fashion and the Construction

Yoshika　SHIGEMATSU, Yoko SONE

3 研究結果

3-1 共通する表現技法の有無と機能性の有無、平均点について

発行年ごとに、共通の表現技法が見られる割合（共通の表現技法のみられた作品数÷作品総数）と機能的であるものの割合（機能性をもった共通の表現技法のある作品数÷作品総数）を計算し図2に示した。さらに、発行年ごとに平均点（得点の総数÷共通の表現技法がみられた作品数）を計算し図3にまとめた。

図2より、共通の表現技法が見られる作品の割合の変容をみると割合が増加している。また、機能性が見られる作品の割合をみると、減少している。このことから建築のファッション化を読み取ることができ、同時に機能性を重視しなくなっていることが考えられる。

図3より、平均点が共通表現技法の割合と同じく向上しているのが分かる。該当項目の増加となり、デザインの多様化が読み取れる。

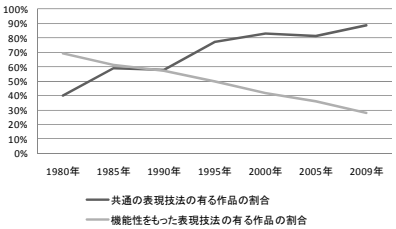

図2 共通表現有り、機能性有り作品の割合

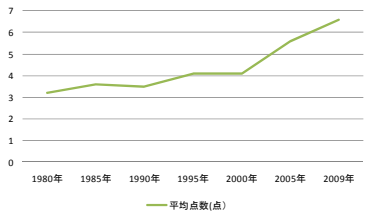

図3 1作品あたりの平均点

3-2 共通表現技法にみるデザインの傾向

発行年ごとに①～⑥に示した共通の表現技法の割合（①～⑥の各総数点÷総数点）を計算し、図4にまとめた。図4をみると、ドレープの割合が減少し、包む・スキンの構造化の割合が増加しているのが特に目立っている。包む・スキンの構造化の割合の増加から、カーテンウォールやダブルスキンなどの技術の発展と共にファサードデザイン（表層的デザイン）への意識の高まりを読み取ることができる。1980年に半数以上を占めていたドレープの割合の減少はデザインの多様化によるものであると予測できる。

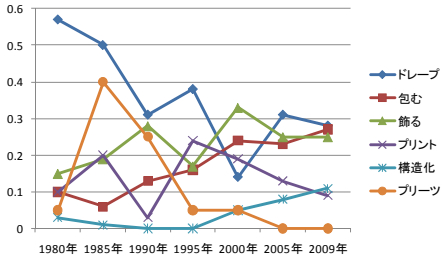

図4 各種共通表現技法の割合の変容

3-3 表面的・内面的表現

発行年ごとに、共通表現技法が表面的・内面的・表面と内面共に見られる三種それぞれの割合（各三種の総数÷共通の表現技法がみられる作品数）を計算し図5にまとめた。表面的の割合が増加することを予想していたが、それに反して表面的・内面的の割合に変化はなかった。表面＋内面が増加しているのが分かり、内部のデザイン意識の高まりが予測できる。

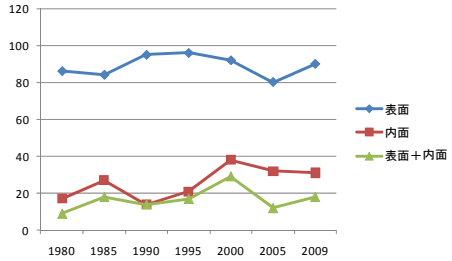

図4 表面的・内面的表現の割合

4 まとめ

研究結果3-1より、近年の建築は機能性重視ではなく、デザイン重視のファッション化しつつあるといえるだろう。調査結果3-2・3-3から、技術の発展により可能になった様々なデザインによるファサードデザインの高度化と、それだけでなく内面デザインも同時に意識されているということが考えられる。

予想に反し表層的デザイン意識は、いつの時代も変わらない割合であり、技術と共にデザインの高度化・多様化が進んでいることが予測できる。

このように、共通の表現技法からファッションと建築の関係性について以上のことが予測でき、今後さらにファッションとの関係性が高まっていくことが考えられるのである。

【参考文献】

1) 新建築1980・1985・1990・1995・2000・2005・2009 1～6月号

2) ﾌｧｯｼｮﾝの20世紀：柏木博（日本放送出版協会）